

續稿文集

七部注解之五

中村俊定文庫  
文庫 18  
1006  
14

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

七部集注解  
續纂  
卷集





後漢書集解

八九月而至京降為校書  
著作郎の如也

漢

後漢書集解の文の西漢の文が多々なつて  
その他の文章は少く、五句の文は空てある  
そのけさ人の如れか西漢の文と云ふ  
次に人の文章は少く、東漢の文にて  
本より言ふれどもててててててててててて  
てててててててててててててててててててて

文

の脛を引ひます。付にまき事の字を  
その形容とし、近りせば細いものと  
の如く窄いもの

初馬と馬を好の御御事

ゆきとさくさ吹の衣

里園

吹のり立つて御御事は、は  
物脊、これて御御事は、  
者とよまる御御事は、は、は、は、  
方一ノと初馬とよまる御御事は、は、は、は、

初馬のうりにて吹の物とて馬の脛  
吹の物とて馬の脛の元もあわざるは  
を松毛とひだるは  
物脊れて馬の脛の脛の脛の脛の脛  
ミシシと如物脊れて馬の脛の脛の脛の脛

里

瑞秋とよまは、は、は、は、

瑞の筆、御文、は、は、は、

服美と筆、御文、は、は、は、

筆と筆と筆と筆と筆と筆と筆と筆

里

竹林の小亭一ヶ所を

蓮

十里あまりのところへ

里

构脊柱とてよしとよき高さ一丈八尺材のうちれ

身もつゝ則候柱とて

屋根は檜皮とて瓦の上に之て板柱のまゝれ  
身もつゝ在合とて又は併床にてひまくと歓安す  
柱頭は四角のものとて柱頭にて通す  
下木は檜のまゝとて根なりてはるもあ  
まゝとて多筋根とて出でてはる根に肥大の出れ  
てはる根とてはる根とてはる根の根頭也

砂利のまゝとてはる根の根頭根の根頭とて  
十里余りの所とて高さ約三丈八尺とて  
と約三丈のまゝとて根のまゝとて根の根頭とて  
てはる根とてはる根の根頭とてはる根の根頭也

坐り候すやうに據えて而ゆき

あたま打をとつ。されば

何處まではる根の根頭とて据え  
やつてやせん意のそ連

てはる根とてはる根の根頭也

ナ里余のとてはる根の根頭とてはる根の根頭也

のまへて書く事あつておううとおもひを寄付す  
西風の吹きゆゑに思ふ天宮の御子ともお  
利潤のためかと心ふらひゆき

物語の身を重んじて長れの様とおはせ  
性とてまことに尊い安の様とおはせ  
次ハ御丈の人にてひきかへるの通達せしむ  
軍主の御事とて、應ひの事にて一語  
おもひ出せば

アラシホシノ類のもの

七

松の木の下に立つて、おはせのうつり  
書を畫えぬれ、作をま  
はげの下ゆきつゝと  
長竹よ少揚の仲よせりと  
くくこりと室の壁をたど  
縁までおよぬ。上  
欄の角のとこね、是れ  
松の木の下に立つて、書を画えぬれ、作をま  
とすの外とぞ、是れの間合にて、而

伊勢の山原をとひては被り合ひに生る  
少陽のあとで南風を吹き在り國境の  
あれ一之音は書くが如き

少陽のせりといひ能の事はいふの故に  
少陽のせりといひ能の事はいふの故に

まごひのきのまごひのまごひのまごひのまご  
ちに因ひまごひのまごひのまごひのまごひのまご  
機のまごひのまごひのまごひのまごひのまご

面のねのねを呼ぶ

演説の牛ノ馬ノシテヨウ

列の歴にはりくも因

演

因侍の情をかのじゆめい

更

棚角のうきはやの角すと限若とえひのせ  
次ハ音化の能能は儀とよ様とよけりに善  
よき物とよき事とよき事とよき事とよき事  
よき事とよき事とよき事とよき事とよき事  
よき事とよき事とよき事とよき事とよき事

扱ひぬ

音とよき事とよき事とよき事とよき事とよき事

夜の所もよし

——

難の葉の名ふる

祥と多下様を極む

往復の事の

削りに努力せしもの風

まほの里のこわき

難の葉を折りて地の風を匂ひの風

まほの里

難の葉の名ふる葉を折りの難

は修とある章の語を以てもせば

字も易いといふうの聲を妙と考へ候

比名  
不祥

その内とてすまの星のきりくをもつて其生ま

じるにあらずとて白度を定む

山にさへ理をあらざるが故に

サキモ

其と大の名を

まほの里のちのたれて

まほの湯をの水

室

古

主理をあそびに川の水あづみの川神 桑老、娘の豊原  
の五音の竹の竹の川の川の妻の御子  
アヌミミシモヒエツツミソノ様アヒルの  
様

ぬきの水”と都つる浦

花立や梅立あだまはす

馬草

アリハの名の前うきは

五圓

主君と黙つてといふ枯木と  
じぐくのいはつば

萬酒

吉

花立ハ四十在五年在山在リよれゆ

アリハの名の前うきは

主君ハ走てあひかとサリもと筆二本のうつ

其角ハナリ呼ミテシテナキ御心の御事望

主君立たとを食ふた五人

走立たと外のは

室

物や一ノリの一分の見抜い

吉

波代もりてをもとす

主君立たと耳はうのうつ

外の道より思ふ所深く  
物を今うそむかとす。従ぬの所は  
行ひゆきゆきもなむ。近侍であつたが故に  
主座席へもとまつておれの物をと  
て坐り候

アラム

まことに幸あたる事  
アラムの國の事  
仰すもまごて見ゆる。故に  
風に吹きよ移の極の處  
室

老を杖の役者よと望み  
死後の譽め居る事

草  
江

吾は之を心に於ておもひよる

阿蘇山の御川かくのより  
まこと多く實にやくすく可もひとと  
謂ふ事の三事の之ゆゑに云うの事を思ふ  
事多く作事と用の取扱ひをせど思ひの事と  
ひづけ先高御達さうすく一場だくと云ひ  
く事ありとてはゆきよ移の極の處  
は是處也

あはれの國をもとめ初秋のまゝ里宿の住人  
旅の日暮よとての宿内事

ゆきのそよ辛風の夜庵

木板をもののこし 一便

傳手をもとめておき 花束で

お静りの洋の洋

寝

警のこちをもとねる

宿

引舟の食事と見てあは

泊

室

伊勢國がひびのひみ 有馬村 七月十九日  
“おおへきかくひきはひきはひきはひきはひきはひ  
白多井の父母と又伯母ともいふ句云々”  
上の歌の歌美江子(さかみえい)  
——

昔を年齢の國をもとめ其のつて一風のうの  
御達(ごだつ)この國をもとめ其のうの  
御達(ごだつ)

歌美江子(さかみえい)の歌之 漢經(カヤキ)

多は物をもとめ其の歌は持物(もじもの)

新嘗の會と云ふ事の如きを筆記す  
年々よあれどもと中高く  
之處教説の為の筆記す  
其宣はシテ有るの如事  
あらも事と考へて  
此より寺の先祖を記す  
歴のうちの如其出

新嘗の會と云ふ事の如事  
あらも事と考へて

三崎教説 越前國山口飯浦 徒士齋著  
かの新嘗國丹波守所事記の如事  
今教説と改々

事と云ふ事の如事  
御と云ふ事はかの新嘗國丹波守所事記の如事  
其の如事

けの事の如事と云ふ事の如事  
次にキリムの如事と云ふ事の如事  
主は又智者國の如事と云ふ事の如事  
力と云ふ事とちがひを繰りと云事  
事も又化せ事と云ふ事の如事

うきは

浦からまたあらうみゆうを寄り  
昇りてゆきよる料裡客  
附のて松原にうめに月

那の月と云ふ世の事

正多ひ止まの事のちと行つて

三月も四月も五月も六月も七月も

嚴伊主館の事はいわゆる讀引書

まきえりあとくそゑ  
松原も行ゆる人を鼻でくせすほんの事  
とくに松原の料理をうるせむ  
料理の事はすこし書くがゆういづれく  
正甚の事も松原の事も

宣傳の事とすとこは記憶を喪失する事より其性

得てゆけり

まことに御とくの初音の事はまだわざと  
つづきとまくよ母の事もよとよとよとよ

西の幻のみ物すまくおと

アドニキはまく松原の川

見 冒

たのじ草を主班よりあうす

うち田の土のれく陽光

15  
宣

重の御、殿ありと領制松の壁

きくはねのゆ

草木と之はてもゆけんとてはる  
ちの陽をひまびく

墨園

その柳の風きくとお

近園

ち根の葉をぬまぐくれて

よ下さり、絶景欣ひ歎

芭翁

町地よりよの隠集 錦

あらわくと通すを次

重

多はきぬ利ぬ初等よつと能と能押出で初見

そつ柳木のあはとて風情を書

月

オニテ言ふの袖をうけてせたぬよしと

四角形筆頭にとね牛毛をすきだの筆研削

之の袖

所それひづれより是よとやかこ月えの城集  
新美ノモリカリカリヒ神

寺門を破壊してちり通ふ道は中秋の通  
ノムニシ神之門

御園院の鐘の音ねにて

楊の枝と楓葉やく

翅の鐘と冰と拂面

同利てあらそよき音

牧童も歌ひの声柳よみて

は

よセラフはりぬ りせ新 宮

智多心の法螺吹工宝ゆり之聲の清音の如

音也此處に還焉と仰

楊の落葉の音は秋の音也かと可  
是を名後悔は言ひ是は秋の音也わん

カ音は暮れの音をも言ひてありきの風音を聞

吹ひ音をも秋の音を呼ぶに良き音をす

此の魚も秋の音を呼ぶに良き音をす  
すす出でて化めと丹鉛の貝利大和のれも

收盡玉立一いづるは二代の毛圓波川の空持と

川の音をうかがふと之の音をもりて

ましやうせんじゆくのせ

まのすよ西酒の水のたる

任物をよみがへりのゆ

うき船を歌と傳ひゆき

まのすよのまくわら室

まのすよのまくわら室

窓の外に夕陽のまくわら室

任物は、眉山にまかれて、宿泊の日す  
心事は、心事の宿泊の水辺の場所をあくまで水酒  
任物は、心事の宿泊の山の林の酒を  
心事の心事をやむとの我食とて、歌の道づれ  
心事の心事をやむとの我食とて、歌の道づれ  
心事の心事をやむとの我食とて、歌の道づれ  
心事の心事をやむとの我食とて、歌の道づれ  
心事の心事をやむとの我食とて、歌の道づれ  
心事の心事をやむとの我食とて、歌の道づれ

百姓なりて世事も長國事  
シテ身の腹すらぬるに至  
るまの泥紙包にわら

今りに是はるゝ事  
砂と達彦の中の結縁の事  
割くに人うなづかば

侍官の身のす、安く福を蒙て百姓の事  
もあきれぬ洞年下柳の陰にさしむる

夫の傳声

内為立年下柳、小廻属腰手とつて  
まよはねり貨物を傳ゆる事  
多細き事の極まりをもつて身を壹包  
たる泥包を包む行け紙通をもるゆり  
やきとく空りよ極えうち紙通を汗干  
拭ふまくすとおもとせぬとす  
あはれは身の毛すか牛糞を角ひて行  
いあはれの身を返てさんのか。此へ出  
たを経て、彼をも結縁えんにせば

きのをとく別法の紙をもあわせ  
はるか字をとくにとほりあらむ

生徒のやうをも陽の都を

一石うど一石の

法室

机のと窓のひももすな

仰げば減の事

日影のと

吸てこよ

之の代に手筋をかね

法

引くとおれ牛もとくにはせんとせましに  
ては取の取あゆるにとくとくのとてとくとく  
勝負がせとくとくわざとくとくわざとくとく

とくとく

窓のひともとくとくのとく

ちとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ト拂よ姫とやうてぬのうる  
金子の朝をこころて仕事  
花の絵アシの日よりい  
ちのひちの山陰の寺  
さくまもケルりじはの甲子  
一面ありてあたえなれ  
思ひがくと向ふと拂よ姫とゆのまこと

春の夜は佳きとておとづれ  
ひびておとづれの夜はおとづれ  
移るはるか御事とおとづれ  
たのむのうい無事とおとづれ  
のゆめの夜はおとづれとおとづれの夜  
のゆめの夜はおとづれとおとづれの夜  
想ひがくとおとづれとおとづれの夜  
口はおとづれとおとづれ  
水圓の池の中とおとづれ  
の月とおとづれとおとづれ  
春の夜はおとづれとおとづれとおとづれ  
とおとづれに又世をすれ

貴は朝からおまの行ひよ猪之吉は  
されりとおもへばく貴院一ノ木と  
此宿の船のうすの船あればとあへたとおの一  
室と御だれのうるのうの船よ出でまきとおのの  
方とおれの船とそあつては國のうにほこ

藤井の東洋くはゆかの神と聖母の事アリ  
夕御よ皆あはゆむは御よの神と西は税馬革倉

帰とよの室舟をひく

朝陽あらは月の通すの日とやうすに了調

雪一まつてあそせぬと詰れ魚

金

金の御とお

金

新う事とう事とおは花語

中國の状の古た古

金

新たと事とおは花語

一重の御ううさて草

金

雨の日とあらとおは花語二重の御う花語  
宣麻の御とおは花語二重の御う花語とおは花語  
次に又聲て焼のうの御とおは花語二重の御う花語  
新よ信能とおは花語とおは花語

おは花語とおは花語とおは花語とおは花語  
おは花語とおは花語とおは花語とおは花語

おなごとくちをひきり拂はれどもあらねど  
おのれの身をつまむるもあらぬと相りがむを心

をひきのうと告げてせ

梅子酒も新ひの口あり

次に破けたままで毛筆をあわせたる

山門より月の板机

初音の人のかけ

水際を渡のゆゑ

見と通す絶角い花の咲き

前

有物をういとふり

アキの樹の用ひも壁の風情も

かうる立つ竹をうむ

搬机のまゝうつむくも月の神玉都と  
まゝは一軒でかうるは晴島よこのやせ  
て耕化まへやく初音の竹林をせう  
人の織ひは天の混雜と叶の纏年と御のえ  
深ゆづれ

此ハ富士をさへたる所と呼ぶ紀の浦の浦内漁

きよそとくも候すにはうなづくとぞ御下

着物をうへてあま岸の人物とまじて以れ札の紙

ちあくまくとまじてあま岸の袖

着物をうへてあま岸の袖

あま岸の脇をえす中から

腰袋の内にハシカガルをあま岸  
腰袋の内にハシカガルをあま岸

あま岸なりりつりうるまわは境

あま岸の腰袋一けのところを

せき能ハシカガルをあま岸と三切くわも

風のきよよひがまわるれの腰袋を

あま岸の腰袋

えまは風のやうりすとんすす例のお病よ苦むたこ  
の事なぐ人もまきとまくるとあらまもまくがく  
腰袋の内ハシカガルをあま岸の腰袋を  
腰袋の内ハシカガルをあま岸の腰袋を

あれことともうもうゆせ

あゆなりはせハシカガルをあま岸の腰袋を  
ハシカガルをあま岸の腰袋を

あゆなりはせハシカガルをあま岸の腰袋を

あま岸の腰袋をあま岸の腰袋を

あま岸の腰袋をあま岸の腰袋を

ゆくし者あひほ

き

赤修竹と風の西面

き

さくまみねの山とちづめ

き

津川アセ汗のとよもと野の音

き

波のりとよもと野と無城の事と海

事の世

アセの波がつづいた

おはた年の風もさよあらは地を

野は風との音があつた

空きぬ野とよもと野と空へと角  
えすかさむと志ふかして萬物の罪をなす事

の風とよもと野の行めとよもと野の  
波よもと野の行めとよもと野の行めと  
よもと野の行めとよもと野の行めと

鳥巣とよもと野の風

き

ちよはいひの東よりすゆ

き

美鶴りりすすとすゆ

き

かうがて市の中と押す

かうがて市の中と押す

野のゆのまゆの春

かうがて市の中と押す

かうがて市の中と押す

き

き

まゝ御饌をすうの時歸みて饌をもとめ  
まゝはて鍋をもとめ鍋をわざと油殿の御へ

味を覺ゆて左の味のまえあらわし

ちエつひ 則左の角にいそぎもせぬ

萬物を萬事の用ひゆく

市中押合よりいへり

山野の河ふの草木がり

一派市主のものもさう油をいはばりたのま

とひ  
野のち生よ絶ゆ

## 今宵賦

聖聰よ文考

今宵は六月の空水を通ひ日と月と万の  
礼山よかけて夜ねむる波水のれきのくゑ

貴傳は六月のうとくゑの是を聖聰の歌の

文考す

壬戌之秋七月既望義理よと密詮舟在赤

聖之下

月の東方の礼山よかけと

ナ馬月對於東山之上能細斗牛之間

白雲落桂紅水光接天

此詩和之極矣——吾猶數子以水的枯老而  
やはちの水の枯老と之に連り  
されども身の心ゆき盡る年年の岸と死ぬと  
其御解てうれしき人甚り——小涼津で歌を  
せめし山中風。

吉田一郎

酒多量多氣

其事の如きよハ詩人

立人の四風

是中二日

大勢一時ノ如く人を喜ばす  
ひまかあらわにわざわざよ無のユサガシム  
主の慶賀也人を喜ばすとさつまく母つきりんと  
あはねひととくとくとくとくとくとくとくと  
みのうとくとくとくとくとくとくとくとくと  
甘草の水よしたうい水のうきとす年じとせ  
も行りう  
オレハ

此詩の言はる事とほの物をたくて何と水あり  
がまうとぞ思ふ又人故に宣判をな水玉宿則無  
世は月の心を盡す

西風の深川の音を聞けりまわす乃ま秋を定め  
かくは此日も月の夜のうつしと夕にて併せ  
の山中より父母の古墳をさるる源の源源山下  
旅店へかく御國の源源山源りそ

西風の音を聞けりまわす乃ま秋を定め  
かくは此日も月の夜のうつしと夕にて併せ

の山中より父母の古墳をさるる源の源源山下  
旅店へかく御國の源源山源りそ

ふい皆枝やの暮れ

かくは此日も月の夜のうつしと夕にて併せ

の山中より父母の古墳をさるる源の源源山下

旅店へかく御國の源源山源りそ

かくは此日も月の夜のうつしと夕にて併せ

の山中より父母の古墳をさるる源の源源山下

旅店へかく御國の源源山源りそ

外 四版

かくは此日も月の夜のうつしと夕にて併せ

の山中より父母の古墳をさるる源の源源山下

旅店へかく御國の源源山源りそ

かくは此日も月の夜のうつしと夕にて併せ

の山中より父母の古墳をさるる源の源源山下

旅店へかく御國の源源山源りそ

萬葉山の勝所の高牛山也  
宿すと伊豆山の山中也  
是の交の溝もあは砂河の山の山根を浸す  
處一渓の水を清めりと見ゆて今  
放すすむ

君よ之交の溝而如水小人之交者其而の體  
山川すは徳也溝も溝人之來メ山也  
我國りのうかの世人に之き一向すと  
ちくすふかわくわくのつら様

人共都すうかひて是を 翠峰て月も仰ぎり  
夕

ナカ波

君の溝を交に山木也とみるも五色も見  
山川も妙に見ゆるも空に見る韓柳れま  
君の山波もさとく一かずつ

霞落鳥啼声滿天

まゝ観ゆる山の瀬も古郎のそと心に  
中それどぞ考へ伊勢の子に住まひて  
するの山を守りやむとぞ

山の瀬すゆて誰か詔前は決語の隔連の山

はうと白きを書きゆく

あうはゆつたけむそも

主別ひてソツヒキよゆけり

三年の今宵も夢のゆく四年

また事ある

湖のほとりに別て汝はかく苦せのまわら

古歌

あらまいかれ もよ宿る

ぬまくわのうめりいも

年ニ暮れ花相如年イ人ふ

今宵の無事にあうままりとさやわくに  
破て眼くよりは死ぬの聲。水を垂せんと  
敵ざらひぬ

坐候中止よしのゆきのまへ人せむる  
うちの理を寫す事で津語と水を音とも似た  
と音と音とすの水を聞の御御莊の一人  
の文人ト称をへきよも

是れゆかの處を吟じて

おはなづかくはのきの極也

其葉

貴はうす育の候ひゆきを極め候て眼の内  
尼姑の教よめあせとて心とて高志のまゝに經中の  
晴けの時候

眼の候は極め候て眼の内にあらわすのを  
眼の候だす也

貴はうつむかへて見ゆて  
仰

古玉草叢の五古押毛

月夜のるもそくのたの

佳氣て清きよしむがま

粉を松竹の外ノ風流

夏

少くよみと書て出で  
二

底もせぬるに一ノ事もあらずすすむ事な

少の事もあらずすすむ事な

そに物を

石を草花に甚めのやうと別を

月夜の外もあらずすすむ事な

すすむかねるを

外への自とて

粉と墨と行ひが昇り立候事あらず  
少粉の事もあらずすすむ事な

山すすむかねるを

ひじりの雨桶とまわらを金鑄  
さまで工事もだへ 四月  
ゆれうすとすと音と相ひて  
柳併の白いよシロイバ

玉盤よ葉と森と草と

辛江

秋風よまづの水風

飯桶と面桶と茶桶と木桶の具と  
茶桶と墨桶と油桶と水桶と

彼子童のくのうりけのうと子の経生とシテ  
心事の物語と書く  
嘆き桶と墨の供と柳併とあはねタリと反シテ  
かのう神牛のうし

タクタクと音と芭翁の聲と歎息と芭翁の聲  
神と心念と芭翁の聲と芭翁の聲と芭翁の聲

馬江で破ひをうけの船

底張て津のえのあまう  
歸ねば今年の春よ歌

豊 義

本居宣長の詩を考

義理の村へゆきとて

也

水呑みの用ひ御ひ初見は如何の故か而て  
之の名を冠していぬにて御重音ねと肩を打つ  
人のちるやうく上唇つけて之の名を冠して是と  
御と名付を冠す人の事の事と湯どきねりと云ふ  
上眼一等の事とて解らぬの事は御と云ふ事は  
御と云ふ事は御と云ふ事は

御と云ふ事は御と云ふ事は

次に手の際と卦句と並びて書はれてゐる

義理の村へゆきとて御と云ふ事は

御と云ふ事

の事と云ふ事は山の事

御と云ふ事は山の事

御と云ふ事は山の事

御と云ふ事は山の事

食事の事も亦構えうる事一枝と云ふ事の

考

うはよとまのせり  
山伏をもひそむて坐るこまかの入宿をもす

山伏の飯とてまつに粒の落とせて至るの神

卯月祭ちづくのまつり

お宿おくと一處いちしょ御食ごしょくをもて坐る所ところに物事も

終まつまつたる者ものの御食ごしょくのまたを

阿あトアト申マサニやナ師シキハ持ハサウム

語ハタチてきよハタチわハタチや

ねネのノわハ伸ハシマリ施スルよハシマリまハシマリくハシマリ神カミ

一と心ハきハせぬハのハ通ハシマリ

思ハシマリまハシマリ身ハシマリへハシマリ就ハシマリける

村ハシマリ一ハシマリ文ハシマリ事ハシマリ國ハシマリのハシマリ事ハシマリ

此ハシマリ一ハシマリ事ハシマリのハシマリ事ハシマリ事ハシマリ

此ハシマリ國ハシマリ事ハシマリのハシマリ事ハシマリ事ハシマリ

二ハシマリ休ハシマリもハシマリ衣ハシマリ一ハシマリ角ハシマリ

体ハシマリもハシマリ身ハシマリもハシマリ下ハシマリりハシマリと

身ハシマリだハシマリもハシマリ身ハシマリもハシマリ刻ハシマリ身ハシマリもハシマリ

とハシマリ身ハシマリのハシマリ身ハシマリのハシマリ身ハシマリはハシマリ

今ハシマリ身ハシマリもハシマリ身ハシマリもハシマリ身ハシマリはハシマリ

廣ハシマリ身ハシマリ

又ハシマリ身ハシマリもハシマリ身ハシマリもハシマリ身ハシマリはハシマリ

多ひの事萬事に身の用へばゆるを以て  
ゆく所  
多事の事萬事に身の用へばゆるを以て  
ゆく所  
多事の事萬事に身の用へばゆるを以て  
ゆく所

今の事に身の用へばゆるを以て  
ちまう所のどひゆすゆる

唐子の花よ能可タチバナと  
腰掛椅ウキイの下

三脚とソトモア持きて之を身の用へばゆる  
ちつと仰あおは四條河ヨリカワすと身移シメイと改ハシメ又あるよ

橋高アマツにあり被ハサウエモソクソクと  
ちまれ障アマツに身の用へばゆるを以て  
タ達タタケも聲ボイスに身の用へばゆるを以て  
一花イチハに身の用へばゆるを以て

### 續 狂 裳 集 故 句 解

漫ふのうゑんをあらゆる ゆ褐

不落

漫ふのうゑんをあらゆる ゆ褐  
漫ふのうゑんをあらゆる ゆ褐  
漫ふのうゑんをあらゆる ゆ褐

島町より又少し月うちつ橋  
まほりにねのまゆ 破れらるる水

席町より

一説そりえもとゆて月がとほひ清く  
初桜月 桜て一月されば島町より又うんとさ  
り

角ノリーハナヒル花の音

ナ年行の音もひ形人

写毛筆の酒卮よせりて文もろれも言も辭のまゝれ

よ思ひ却く  
文君、附印之富人卓王孫娘也司馬相如以琴  
心挑之相立而棄之為妻也

酒卮筆よせりて文もろれも密つた

特

毛筆の事も度も水の音

極

毛筆の事も度も水の音

極

毛筆の事も度も水の音

極

山吹や桜行ひる羲アモ

書

高持賀物追手の曲よつ村もさかを嘆むと  
竹の子をやうす家裏一侍をよこしたててわざと  
あく山吹の花一茎さかしたて持賀モ西野人主神て

遊々の事小是はいの事とやう事一見はあらう  
七をりをひきとせまつる山の

よーくほんじゆく

よんぐるのとことくは精質ある船をもとあると  
ゆうてま武の名士とソシテー  
ウモウシ御すあれども

山被ももとをゆの傳りまん

酒堂

ニモ因會曰船ノ嘴尖如鉄海船遇之時百技  
故名船通カチト 一役鷲の声振ると

りげの壁のよきよるの直

夙膳

この至るまことに一木にあらへざれど  
よしむる

呑川は蜀士の歌りしう事

そいだらぬの夜うて煙函スモケンといふ

其の音立有能なる四十番

苦口

在院とはそのうと多は本の音立てゆ

あらうゆくゆくの匂

延年と延の意のえある事

石屋

延年とはそのうと多は本の音立てゆく

著葉の匂すかしはゆ

酒門

周端

蓮華の飾りを九室の貝の子を取て持てとす  
ゆくやのわたくし姫　眞之子　其角  
え能く宣の姫と虚の風もうけんじて纏うるをと  
風のヨリソノ

墨　坐の室にそよ包庵の飼の友　耕雲

白尾の御を包む御網絹の毛

福主やアリの枝の白比丘尼

翁門

はは白眼明神の盃とすちまぐり四萬才

とは三ツのこゑあわせ

ちぐや裡つゝて夕涼

牡丹

アリ（カニク）  
金の鏡を五郎とすてまぐり

五郎の因の裏を掉つて

乙歩

まよみかづや花をまぶの御

花もすれぬ地もあひの草代

星東

白煙からもカトモ徵（ツユ）

徵バイカビ

骨牌（ツバメ）て手の筋をやむ青角

松風

お火活の音小川とまの音をやむ引舟（アキボウ）て叶わく  
とまれハ波打つて波舟（アキボウ）と

ちづ織をもよろこて 柳鏡

すま

ちくはの浪打と海風を陶三さす  
まきじくぞ

河津の奥ノリと鰐、細長き

小魚

そくさにあ勝白の圓の露夜

萬葉

まよわせりともうかみもせの内侍

夕富はるまきる酒

水鷗

ゆ年は寧のよ松至とくまゆの圓の露夜

名月乃海波吹の圓暮

酒堂

田巣鳴は名月

待めりま

柳ひきの花がむくらぬ

室裏

ひるいさきとまなガル

女郎た卯宿の枝だれれ

鳥莢

卯宿の神のあれよ神を極とむや直つ女とす女郎た  
の人争ひされど此すちびすと風興をまし

さよのをすものうつまね

史邦

佐角姫 徒貴新羅より和船へ抜兵を遣て舟伴の  
妹を乞はせよわく御前書のさす姫史の別語  
かずくふ 松浦の山にて北野天香死るを聞て  
ゆまをさうそ

つまはれ　高松の里をもやうとくらむ  
花女郎もうとれど

花女郎もうとれど

物　珍や花は身に付かず

花

原野紅もす淡すよもすを金、言はばしの原野  
花もすの花もす原の花もす花もす

水もす紅也たまて湯スバの母

風

錫<sup>ハ</sup>花へる

きりしの傍で種をばら

花

春<sup>ハ</sup>玉簪子へいと窓をこ

ほめとひなまつらはまくらむすけ

原野<sup>ハ</sup>原野あふとす

風

ちゆのよきとて枝をとすま

花

天臺山の雨山<sup>ハ</sup>天の花の花の花

花

松原<sup>ハ</sup>松原あすとす

花

つ人<sup>ハ</sup>茶酒<sup>ハ</sup>とす

花

様<sup>ハ</sup>主<sup>ハ</sup>は様<sup>ハ</sup>のをとす井入のをとす

花

着<sup>ハ</sup>手<sup>ハ</sup>もすとすとす

花

あまにまの花<sup>ハ</sup>とす

花

之縁 辛酉初冬月 喜重山甫國之啟

主陽之氣是神聖自の氣と能佑もとと  
主火之氣は火くともやうも善氣也而く  
主陽とは心身目を展主陽のたぐ  
力也すもあわてて往來主御て今此  
トモヤクヨリ多幸す

喜重の主ノ也、唐のゆき乃の宿の主

是為变化。身情よきのにゆき多の宿主

——喜重の主なるともかく下に宿主おなと取

喜重の陽土無害の琴を取るを喜む歸の主  
主火の火も造作も喜まず及ばず今主喜  
主火の火も造作も喜まず及ばず今主喜  
主火の火も造作も喜まず及ばず今主喜  
主火の火も造作も喜まず及ばず今主喜  
主火の火も造作も喜まず及ばず今主喜

之縁 之縁 之縁 之縁 之縁 之縁  
喜重山甫國之啟 謹啓 有立人  
仰歎氣の主と之すゆ

范陽鶴が趙南の事より  
少々の筆の歌。仰へ

一言もさういふ事のあられ

決心石肝のかたき悲歌

義



